今日のイラスト 307　「 イラストでたどる萩往還⑥　吉田松陰短古の碑 」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 06　吉田松陰短古碑

唐樋札場
吉田松陰短古碑
萩
山口
美葉荘（三田尻御茶屋）
防府

文・イラスト＝古谷眞之助

明木の街に入る手前に吉田松陰短古（唐時代以前の漢詩の形式）碑がある。下田で密航に失敗した松陰は安政元年（1854）に萩に護送される際、明木橋でこの詩を詠った。「少年志す所有り／柱に題して馬卿に学ぶ／今日櫻輿にて返る／是れ吾が書錦の行」。詩意はなかなか難しいが、「志を立てたものの罪を得て帰郷する身となった。しかし私としては故郷に錦を飾って帰る思いである」というほどの意味である。罪人となったが、恥じることなど一切ないと実に彼らしく意気軒高である。護送責任者・武弘太兵衛の日記に、10月23日三田尻を朝6時出発、雨の中を夕刻8時に明木に着いたとあるので、かなりの強行軍だった。

つくづく思うのだが、吉田松陰と言う人は、本当に「すごい」人だと思う。「すごい」には色々な意味があって、例えばこの短古（ 唐時代以前の漢詩の形式 ）である。下田での密航に失敗すると、潔くそのまま名乗り出るという、「非常識」としか考えられない行動をとるが、それこそ「自分は信念に従って正しいことをしたのであって、誰に恥じることもない」という強烈な意志があればこそ、なのだろう。ペリー提督の黒船に日本中がひっくり返っている時、その船に乗ってアメリカに渡り、新たな知識や技術を身に着けて日本に持ち帰り、近代的な日本を作ろうというようなことを、考えるだけなら考えた人は他にいたかもしれない。しかし、それを実行に移したのは、吉田松陰ただ一人である。ここには自己に対する絶対的な自信がうかがえる。しかもそれに慢心することはついぞなかった。また、特に教育者としての資質には目を見張るものがある。松下村塾時代は幽閉の身でありながら、彼の最も輝かしい時であったろう。彼が塾生一人一人の資質と学力を見抜いて、高い見識や知識を大上段に振りかざすのではなく、一つ塾の中にありながらそれぞれの特性を引き出す個別教育を実践したことは良く知られている。高杉の向学心を煽るためにわざと久坂を褒めたり、伊藤などは早くも「周旋の能力あり」と指摘したりしてもいる。形式にも拘らず、机の配置も寺子屋方式のような対面する形ではなく、四角く机をつないで講義するのを好んだと言う。教えられる塾生たちにしてみれば、本当に楽しい学校だったに違いない。もちろん彼のすごさはそれだけでない。老中間部詮勝の暗殺を本気で企て、藩に武器弾薬を支給するよう上申してもいる。さすがにこれには晋作も玄瑞も手を焼いたらしく、思い止まるよう手紙を書いているが、松陰はそれに激高して二人と絶交している。彼に言わせれば、あくまで自分の信念を貫いただけに過ぎないということなのだろうが、松下村塾の双璧と言われた二人にしても、半ば狂気に近いと思わざるを得なかったのだろう。また、29 歳にして没した彼は生涯女性を近づけなかったという。しかし、唯一心を通わしたと思われる女性が一人だけいる。野山獄の女囚、高須久子である。いよいよ江戸護送が決まった時、彼女は汗拭きを松陰に送っている。それに対する松陰の返歌「箱根山 越すとき汗の い出やせむ 君を思ひて ふき清めてむ 」。儀礼的な歌ではなく、深い思いを秘めながらも必死でそれを押さえている。この点、女性に対しても「すごい」のである。女たらしで有名で、それを明治天皇からも諫められたという伊藤博文は、その点だけは松陰に少しも学んでいないようである。（ 2019.9.30 記 ）